

「英語落語」の意義とその可能性 —英語科教員養成科目への応用を視野に—

Significance of English Rakugo and its Potential:
For an application to English teachers training course

拝田 清・藤吉 大介
Kiyoshi HAIDA・Daisuke FUJIYOSHI

キーワード：英語教育、英語落語、日本文化の受信・発信、教員養成

はじめに

昨今、日本の公教育における英語教育では「聞く」・「読む」・「話す」・「書く」という4技能の総合的・統合的な向上が求められている。公教育、特に義務教育において外国語能力の4技能全般の力をつける必要が本当にあるのかという議論は一旦は措くとして、社会の要請、あるいは世間の期待としては、「話す」力をつけることが第一に上がってくるだろう。とりわけ、英語科教員養成課程においては、教室で生徒・児童にそれを要求するかという議論とは別に、4技能において高度な技能を身に付けさせることが肝要となる。本稿筆者の内の一名はこれまでに英語科教員志望の学生にクラスルーム・イングリッシュの訓練を施し、それが内在化し自動化することを目的とした授業を行ってきた。このような言わば基礎的な訓練に加えて、やや応用編として、英語の授業に演劇のワークショップを取り入れる試みもある(塩沢2008、など)。このような手法が英語の習得に効果的であることは言うまでもないが、シェークスピアの戯曲など、将来英語教員を目指す学生には本来は馴染んでおいてほしい教養知のひとつではあるが、実際のところ学生にとってはなかなか敷居が高いのと、教員が指導することはもちろん、指導者の確保が難しい。そこで、類似の効果が期待でき、実施可能なものとして、数年前に英語落語の導入を本学で開講している英語科教育法の中で試みたことがある。

落語を英語で行う英語落語は、1,2でも言及するが、何より日本文化の発信につながる上、落語を学び、それを英語に変換する過程で、学生はまず日本文化を再認識することになる。また、たとえば蕎麦やうどんをすすする音が英語圏文化の人々には時として嫌悪感を引き起こすこともあるなど、異文化接触への配慮も必要となってくる。そして、「笑い」という行為は当たり前のようでいて実は極めて文化的知識や百科全書的な教養知が求められることを学生は思い知るのである。ハリウッド製の喜劇映画などでしばしば行われる「パロディ」を理解し楽しむためには、その元になっている「正統な芸術」自体と社会文化的な教養知が必要なのである。笑いと

いうのは極めて知的な営みであり、深い教養を要求するのである。

また、演劇とは異なり、英語落語は個人でのパフォーマンスとなることも、英語教員にとっては有益な技能を与えてくれる。多くの場合、教員は一人で授業を行うため、教壇に立って児童・生徒の注意を喚起し「聞かせる」話し方、声量の調整や抑揚の付け方、「間」の取り方、所作など、必要な技能を習得することが期待できる。また、中学校の英語教科書によく見られる対話形式の本文を範読する際、二人の人間を体の向きや声音を変えることで演じ分ける落語の技術は大いに役立つと考えられる。ペープサート（紙人形劇）を推奨する教員もいるが、準備に手間がかかることや両手が塞がれることなど、模擬授業などで学生が試みている姿を何度か目にしたが、授業内での有効性は限定的なものであるという印象は拭えなかった。

さらに、英語落語は中高の英語教科書でも紹介されることが少なくない（第2章）ため、学生にとっても馴染みがある。また、落語自体はテレビやラジオ、インターネット動画、CDやDVDなど、多くのメディアを通して触れることが可能である。英語落語を通じて、彼我の文化的差異を意識し、学び、そして発信する。その過程で、英語という言葉自体も音声を中心に体感し自らの血肉として内在化していくことが期待できる。英語落語は、その導入に際してしかるべき指導者が適切な指導を行えば、大きな効果を生むことが期待できるのである。

そこで本稿では、英語科教員養成科目への応用を視野に入れ、「英語落語」の意義とその可能性について考察していくことにする。第1章「英語落語の概要」では、英語落語の歴史と英語教育における英語落語の意義について、第2章「英語教育における英語落語の実態と実践の試み」では、中高の検定教科書における題材としての英語落語の実態を概観し、また、実際の高校や大学の教育現場での英語落語の授業実践を紹介する。そして、第3章では「英語科教員養成科目への応用」と題して、近い将来における本学での英語科教員養成に英語落語を導入する可能性も念頭に置きつつ、議論を進めていくことにする。

1. 英語落語の概要

落語は、江戸時代に誕生し、現代まで続いている伝統芸能である。それに対し、英語落語の歴史はそれほど長くはない。ここでは、英語落語の歴史と、英語教育における英語落語の意義について考察する。

1.1 英語落語の歴史

英語落語は、上方の落語家である桂枝雀が、1983年に英会話学校の門をたたいたことに端を発する。英会話学校での自由会話の時間に、米国人講師の前に話す話題が見つからず、「話したいことは落語しかない」と言った枝雀に、校長の山本正昭が英語で落語をすることを薦めたのがきっかけだ。それから、枝雀と山本、米国人講師の3人は、落語を英語にする作業を続ける。1984年に、その米国人講師の故郷である米国のペンシルバニア州に枝雀は滞在し、初めて英語落語を行なった。聴衆は、数キロ圏内から集まった老若男女40名程度。大草原にマットレスを何枚も重ねて高座を作り、トラクターのヘッドライトを照明代わりにした。日本人を見たこともない聴衆は、最初は何が始まるかもわからない様子であったが、サゲ（落ち）では大爆笑で

あったとのことである。山本（2001）は、「我々とアメリカ人の垣根が取れたのだ。彼らは『今まで日本人はエコノミックアニマルでクールな人間だと誤解していた。悪かった。私たちは同じだね』とでも言いたげだった」と述べている。それ以来、枝雀と山本は英語落語の活動を行なうようになる。米国、カナダ、オーストラリア、シンガポール、タイ、英国で公演を行なった。その公演のひとつである1990年の米国公演で、英語落語に魅せられたのがスタンフォード大学で国際政治学を学んでいたビル・クラウリーだ。1992年に山本を頼って来日し、英語講師となる。ほどなく山本から英語落語を勧められ、枝雀と共に海外公演に同行した。枝雀らの海外公演は、枝雀が亡くなる2年前の1996年まで続けられた。

一方、1998年より、大島希巳江が、桂かい枝、桂あさ吉、笑福亭鶴笑、林家いっ平（現二代目林家三平）らと英語落語の海外公演を米国やシンガポールで行なった。かい枝は、英語落語の活動が認められ、2007年に文化庁文化交流使に任命された。キャンピングカーで全米30都市以上を訪問し、90以上の公演を行なった。他にも、立川志の輔は2006年から2008年に大銀座落語祭において英語落語を口演したし、三遊亭竜楽は、英語のみならずイタリア語、フランス語など8カ国語で口演し、9カ国で150以上の公演を行なっている。また、非日本語母語話者の落語家も存在する。ダイアン吉日と桂三輝（かつらさんしゃいん）である。前述した枝雀と山本は、海外公演の傍ら国内でも公演を行なっていたが、英国のリバプール出身のダイアン吉日は、来日して枝雀の落語会でお茶子（高座で名札をめくったり座布団を返したりする役割）をしたきっかけから落語の魅力に取りつかれ、アマチュアバイリンガル落語家として活動している。桂三輝は、カナダのトロント出身で、桂三枝（現六代目桂文枝）に弟子入りし、英語と日本語の両方で活動している。英語落語の聴衆は、日本語母語話者のみの場合もあれば、非日本語母語話者のみの場合もあり、またはその両方となるが、いずれかに限定されて口演されるわけではなく、状況次第である。海外公演であれば、自然に非日本語母語話者が多くなる。

英語もしくは他の言語で落語を語ることには、否定的な意見もある。西本（2002）は、大島（2001）の「異文化コミュニケーションにおけるユーモアの果たす役割」としての英語落語の効果を認めつつも、「話芸としての落語とはあまり関係があるとは言えない」としている。「わが国の文化を海外に知らせるためなら、落語に限らず、学問研究も出版物も、旅行も映画その他の映像メディアも、まだまだいくらでも方法があるだろう」とし、「もう一つ別の言葉にわざわざ落語を翻訳して、タドタドしく演る必要があるであろうか」と否定的である。

確かに、「本職」の落語家が、一生をかけて己の芸の完成を目指して精進しつつ語る芸は、日本語で、さらに言うと同東では江戸ことば、関西では大阪ことばで語られるものが「落語」であろう。しかし、そもそも「落語」の定義はなにか。例えば、「寿限無」や「壺算」、「時そば」といった「ある一編の物語」として残っているものが落語なのであろうか。それらは、「古典落語」として括られることもあるが、それでは「新作落語」は落語ではないのか。寄席などでは短い小噺で高座を終える演者もいる。その日のその演目は落語ではないのか。毎回同じような漫談スタイルの演者もいる。その演者は落語家でないのか。そうではあるまい。いずれも「落語家」による「落語」なのである。はっきりとした定義を見つけることはできていないが、伝統的に継承されている落語とは、おそらく、「落語家が高座で話すことすべて」となるのかもし

れない。そして、その「落語家」とは、「本職の落語家」ということになる。すると次に、「本職」の定義は、ということになる。大多数は弟子入りをして落語家を名乗ることを許された人々であろうが、例外もいる。落語と落語家の定義は、それぞれ境界線があいまいな面があるのかもしれない。

さて、日本文化の伝統芸能としての「落語」は、文化の継承という意味でも日本語（さらには日本語のある方言）に固執しなければならないのかもしれない。しかし、落語というコメディ形式を持った文化までも、言語を理由に閉鎖的なところに押し込む必要はないと考える。さらに、落語の内容以外、つまり、言葉によるもの以外を考えてみても、落語の形式には日本文化の様々な側面がある。座布団の上に正座をするということ。着物を着るということ。扇子と手ぬぐいを使用するという事などである。本稿では、英語教育における落語について論じる関係上、ある程度独立したまとまった物語を「落語」とし、短いものを「小噺」と呼ぶこととする。次節では、英語教育における英語落語の意義について考察したい。

1.2 英語教育における英語落語の意義

英語教育における英語落語の意義は、以下の3点である。笑いの重要性、日本文化の受信、日本文化の発信である。

1.2.1 教育における笑いの重要性

落語は、笑いの形式のひとつであり、近年、笑いの重要性が認知されてきている。医療分野でも、落語や笑いのビデオ等を見て笑う「受け身の笑い」が、NK（natural killer）細胞活性を上昇させたり、ストレスホルモンを低下させたりということなどが報告されている。さらには、「作り笑い」という、楽しくなくても形から入る笑いであってもNK細胞は活性するという報告もある。このように、笑いは、心身に好影響を与える重要な要因なのである。そして、笑いの重要性は、教育現場においても例外ではない。井上（2002）は、「笑いは親和的な人間関係を形成する」と述べており、これは授業において、良質なT-S、S-Sコミュニケーションを形成するのに役立ち、良質な学びの環境の構築へとつながる。森住（2006）も、良い授業の3要素として、「大きな笑い、一瞬の緊張、適度な私語」を挙げている。また、観賞する題材内容としての笑いを取り上げた場合、「習熟度に大きな向上」（Deneire1995）が見られ、「学習者の興味を引き付け、集中力を高める」（大島2006）という効果もある。また、発表する題材内容としての笑いにも、利点がある。大島（2006）は、「笑いやユーモアは聞き手を寛容にさせる」と述べており、聞き手に肯定的・協力的な姿勢を促進させる。発表者自身に対しては、言語活動（音読・暗記・発表）に対する意欲を高め、話す間（ま）、表情、しぐさなどの「話す技術」、つまりプレゼンテーション能力の向上を促す。このように、笑いは、良質な学びの環境を形成するのに効果的であり、観賞（受信）および発表（発信）する題材内容としても、学習者に良い効果をもたらすのである。

1.2.2 日本文化の受信

日本文化の受信とは、つまり、日本文化を知り、理解することである。教育基本法の第二条の五には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」（下線は筆者による）とある。また、「学習指導要領解説 外国語編・英語編」の「第2節 外国語の目標」のひとつに、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること」があり、「外国語や外国の文化のみならず、日本語や我が国の文化に対する理解を深められ、さらに、言語や文化に対する感性が高められ、ひいては、広い視野や国際感覚、国際協調の精神を備えた人材の育成につながること」（下線は筆者による）とある。英語の授業においても、日本語や日本文化への発見・理解・確認を促すことが必要なのである。そのため、中学・高校の、学習指導要領をもとに作成されている文部科学省検定済み教科書（以下、教科書）にも、落語だけでなく、和食をはじめとする日本の食文化や、文楽、書道、詩や俳句といった日本文学などの日本文化を題材としている課が多くみられる。そのような日本文化の中で落語を取り上げることは、過去の日本人の庶民の生活様式や生き方を理解することにもつながるのである。

2. 英語教育における英語落語の実態と実践の試み

本章では、英語落語が実際の英語教育の現場で、どのように扱われているかを概観し、考察する。まず、実態としては、中学や高校の教科書に、題材としてどのように扱われているかを見てみたい。対象の教科書は、1982年から2016年までに発行された教科書とした。これは、1982年以降の教科書から、特に広く世界の人々の日常生活、風俗習慣などが取り上げられるようになったためである。大学においては、大学における英語落語の実践例を紹介する。また、筆者の高校での実践例も章末で紹介したい。

2.1 中学・高校教科書における英語落語の実態と実践の試み

1982年以降2016年までに出版された中学英語教科書は、174点であった。その中で落語を取り上げているのは11種類あった。落語を中学英語教科書で初めて取り上げたのは、*New Crown 3*（三省堂1993～1996）だ。リーディング教材として掲載され、タイトルは“I Hate Manju.”（饅頭怖い）である。改訂版でも継続して採用され、2001年まで掲載された。*New Horizon 3*（東京書籍2002～2011）では、「1.1 英語落語の歴史」でも触れたビル・クラウリーを取り上げ、英語落語の活動について紹介している。2012年には3冊の教科書で英語落語が扱われ、2016年の改訂版では*New Horizon 3*で扱われた内容がそのまま*New Horizon 2*に移行されたり、新たに*Sunshine 2*で小噺が取り入れられたりしている。内容については、落語の演目に関するもの（饅頭怖い、動物園、ヘビの小噺）と英語落語家の活動に焦点をあてたものの2つに大別できる。英語落語家の活動に焦点を当てたものについては、インタビューをリスニング教材として使用するものと、リーディング教材としてインタビューや異文化体験を読ませるものの2種類があった。課末の課題として、発表を視野に入れたものの割合は、40%であった。

(表1：中学英語教科書における英語落語)

New Crown 3		饅頭こわい ('93-'96)	饅頭こわい ('97-'01)			大島希巳江 ('12-'15)	大島希巳江 ('16-'21)
New Horizon 2							桂かい枝 ('16-'21)
New Horizon 3				Bill Crowley ('02-'05)	Bill Crowley ('06-'11)	桂かい枝 ('12-'15)	
One World 3						動物園 ('12-'15)	動物園 ('16-'21)
Sunshine 2							小晰 ('16-'21)
教科書の改訂年度	81	'93	'97	'02	'06	'12	'16 '21

次に、高校教科書を見てみよう。1982年以降2016年までに出版・使用された高校英語教科書のうち、英作文や文法、オーラルコミュニケーションの教科書を除いた901点を対象とした。これは、英語落語がそもそも物語であるから、リーディングが主たる活動になる教科書を対象としたためである。内訳は、「英語Ⅰ」が305点、「英語Ⅱ」が312点、「英語ⅡB・リーディング」が209点、「コミュニケーション英語（以下、コ英）Ⅰ」が28点、「コ英Ⅱ」が25点、「コ英Ⅲ」が22点である。この中で、落語を取り上げている課は16種類であった。高校教科書に英語落語が登場するのは中学教科書より10年早い1982年である。タイトルは「Rakugo」で、内容は落語の解説と演目「粗忽長屋」のリーディング教材であった。高校教科書は、中学教科書と比較すると落語の演目をそのまま取り上げているものが多い。また、言語活動は、落語を発表させるものが40%であり、中には英語落語の演目一席がリスニング教材となっているものもあった。

(表2：高校教科書における英語落語)

The New Century I	粗忽長屋 ('82-'84)	粗忽長屋 ('85-'87)					
The New Century II			粗忽長屋 ('89-'91)	粗忽長屋 ('92-'95)			
MILESTONE II			かぜうどん ('89-'91)	かぜうどん ('92-'95)			
Lingua-Land II					手話落語 ('95-'98)	手話落語 ('99-'05)	
MAINSTREAM II						時そば ('99-'05)	
SPIRAL Reading						Bill Crowley ('00-'05)	
POLESTAR II							動物園 ('04-'07)
PROMINENCE I							芝浜 ('07-'11)
Exceed Reading							猫の皿 ('09-'14)
LovEng II							ダイアン吉日 ('08-'14)
Genius I							ダイアン吉日 ('13-'16)
All Aboard I							小晰 ('13-'16)
教科書の改訂年度	※高校教科書の改訂は学年進行で、教科書の使用期間がまちまちのため記載しない。						

2.2 高校での実践例

ここでは、高校における英語落語の実践例を紹介する。いずれも筆者による例で、一つは部活動として、もう一つは、出張授業として行なったものである。

一つ目の実践は、私立高校の英語部の1年生の生徒2名に対して行なった。課外活動の英語部の活動の一環として、文化祭での発表を目標に設定した。活動は週2回であり、11月の文化祭へ向けて5月から指導を行なった。対象の生徒は、いずれも落語そのものを見聞きしたことがなく、DVDなどで落語をまず観賞させた。その後、英語の小噺をいくつか提示し、音読し、暗記させた。同時に、正座して、顔を左右に振り分けることによって異なる人物を演じる（上下〈かみしも〉を切る）練習もし、1学期の終わりには何とか小噺の一つ披露できるようになった。夏休みの間に、筆者が提示した12分程度の英語落語の台本の中から一つを選んで練習するよう課題を出し、2学期には集中的に英語落語の練習をした。文化祭直前には生徒からの希望で週2回の練習が毎日となり、自主的に朝練習まで始めた。生徒が選んだ演目は、「いらち俵」と「桃太郎」であった。「いらち俵」は急いでいる男性が慌て者の人力車に乗ってしまい騒動が起こる噺で、「桃太郎」は昔話を現代っ子に読み聞かせする際の親子のおかしみのあるやりとりの噺である。文化祭本番では、教室を半分に区切ったスペースを会場とし、二人で約30分の公演を二日間で6回行い、生徒や保護者が観賞した。文化祭のあと、約半年にわたる英語落語の活動について、英語部の生徒に感想を書いてもらった。演目に関しては、「わかりやすい会話文で身近な単語が多く、覚えやすかったし勉強になった」「『お腰につけたきび団子、一つ私にくださいな』を英語で言えてよかった」「『柴刈り』という語を初めて知った。『芝刈り』だと思っていた」などという感想であった。英語の学習の効果としてでなく、自文化への理解の深化へもつながったことがわかった。本番の発表に対しては、「舞台上上がったときの緊張は想像以上だった」「公演を重ねるにつれて、気持ちを入れ替えることができた」「見に来て下さるお客様のことを考えると、練習しなければいけないと思い、励みになった」「自分だけがうまくいくことを考えるのではなく、公演全体が成功することを望んだ」「来年はもっと多くのお客さんの前で落語をして笑ってもらいたい」などであった。英語落語の持つ独特の発表形式が、学習者の意欲を向上させたことを実感した。翌年、英語落語に取り組んだ生徒の一人は、新入生400人強の前で体育館のステージで同じ落語を披露した。もう一人は交換留学生に選抜されて渡米した。

二つ目の実践は、筆者の勤務校ではない他の高校から依頼され、短期留学予定の高校生12名に対して出張授業という形式で行なった。留学先で日本の小噺を披露することを目標として設定し、三回に分けて指導した。初回は英語落語を観賞し、落語の歴史、形式、演じる際の留意点などを講義し、小噺の音読を行なった。二回目の授業は、初回の4ヶ月後に設定し、その間に生徒は、通常の英語の授業の中で小噺の練習を行い、ペアワークまたはグループワークで、演じ方や話し方などを指摘しあった。二回目の授業では、英語落語を観賞した後、生徒は机を組み合わせて座布団を置いた簡易的な「高座」に上がり、小噺を発表した。その際、演技のポイントや間、しぐさなどを指導した。指導されたことをその2ヶ月後の三回目の授業までに練習し、三回目の授業で一応の完成形を披露した。生徒の感想としては、「ストーリーがあると覚

えやすい」「面白い話だと覚えやすい」「一人で会話の勉強ができる実践的な学習方法だと思った」「何度も口に出して練習するため、単語を覚えることが簡単になった」など、肯定的な意見であった。中には「外郎売」を英語でやってみたい、と長い嘶に意欲を見せた生徒もいた。また、同じ小嘶を選んでも、生徒はオリジナリティを出そうとし、工夫が随所に見られ、英語落語の持つ発表形式の強みを非常に感じる事ができた。落語は、たとえ筋がわかっている、飽きることなく楽しく聞けるし、演者が変われば、嘶の魅力も変わる。同じ小嘶を立て続けに発表しても、生徒の工夫や、それ以前に生徒の個性が前面に出て、台本が同じでも独自の「嘶」となりえた。落語の持つ力を再認識できた実践であった。

2.3 大学教育における落語の実践例

英米文学科の選択必修科目として英語落語の授業を設定している大学がある。藤澤（2010）によると、授業の到達目標を「英語を使ってパフォーマンスできるようになること」とし、細目として「英語落語を実践することで英語の表現力を高めること。落語を演じる上での創造性や自立性、コミュニケーション力をつける。日本の伝統文化の発信という点での異文化理解の視点を身につける」を掲げている。実際の授業は、1回目に落語の歴史や文化についての講義の後、実演が入る。2回目以降は英語の発音やリズム、翻訳の工夫を経て、いくつかの小嘶を練習した後、実際に英語落語を一口演じできるようになるまで深めていくというものだ。藤澤は、英語落語の英語教育における利点を次のように述べている。

- (1) 英語の十分な量のインプットとセリフの定着率が非常に高い
- (2) 英語のセリフと身体の動きの一体化につながる
- (3) 自然でリアリティのある英語を身につけることができる
- (4) 人前で英語を発する自信を生み出す
- (5) 一人で練習をすることが可能
- (6) 笑いのユニバーサルな点やローカルな点の発見

以上、中・高・大における英語教育における英語落語の有効性について概観した。英語落語は、日本文化の受信としてのリーディング、リスニングと日本文化の発信としてのライティング、スピーキングの両面で意義があると言える。

3. 英語科教員養成科目への応用

本章では、大学の英語科教員養成科目への応用について考えてみたい。すでに述べてきたように、英語教育における英語落語の有効性は高い。大学で英語を学ぶ学生の、自身の英語力を向上させる点からも有効である。さらには、教員を志す学生にとっては、教える側になった際の重要な視点を学ぶことができる。当然、英語落語だけが重要なわけではない。教科書の題材は大きく「ことばの教育」「異文化理解教育」「人間教育」に分けられ（森住 1992-1993）、生徒に身近な題材もあれば、新たな発見や気づきを与える題材もある。これらに関して、生徒や学生

に、考えさせ身につけさせなければならないのである。そのような題材に対して、英語教員はその題材を「料理」し、授業を設計していかなければならないのである。本章では、多岐にわたる題材の中で、英語落語の教員養成における利点について述べたい。

3.1 4 技能の向上

英語落語は、4技能の向上に効果的である。まず、リーディング能力への効果について述べる。英語落語一席の内容を読み、噺を覚えるために音読する過程で、登場人物の性格、噺の流れ、サゲなどについて文化的背景知識などと組み合わせながら理解を深めていくことができる。昔の日本人の生活や風習などが英語でどのように表現されているかについても理解を深めることができる。次に、スピーキング能力についてである。落語は、平易な会話文で物語が進行するため、日常の会話で使用される表現が多用される。英語落語の練習で、何度も口頭練習することで、これらの日常表現が定着する。相手に聴き取ってもらい笑ってもらう前提から「ただやみくもにフレーズ練習する」こととも異なり、高い意識や意欲とともに学習が行われる。こうして、スピーキング能力の向上につながるのである。リスニング能力の向上については、グループワークで行うのが効果的だ。他人の噺を聞いて理解する活動の中で、リスニング能力が培われる。落語一席すべてを英語にしようとする膨大な労力になるが、ライティング能力の向上にも非常に効果的だ。一席すべてでなくても、日本語で語られる噺と英語落語の台本を比較して、どうしても入れたいセリフやクスグリ（ギャグ）、非日本語母語話者には理解しづらいと思われる語句や表現を、同意表現で言い換えたり、地の文で説明したりということは必要になってくる。たとえば、人力車の噺で、“About 100 years ago, *Jinrikisha* or Rickshaw in English ran on the street.”や“*We call a person who pulled a cart a Kurumaya.*”という具合に、である。このように相手に理解してもらえるように工夫を重ねることは、試験問題作成などで会話文問題や手紙文問題を作成する際にも効果的だ。試験問題作成者よがりの、唐突な状況設定ではなく、設問で求めている英語運用能力を問うための適切な状況設定力を培うことにもつながる。以前、会話文問題で、街中でいきなりトイレはどこかと聞くところから始まり、いちばん近くで借りることができそうなトイレを問答する英文を見たことがある。問われた人の「*theater* かどうか」という提案に、「そこは遠すぎる」などという問答の英文だ。そこまでの緊急事態であれば、人に聞いている余裕はないだろう。

3.2 プレゼンテーション能力の向上

英語落語は、プレゼンテーション能力の向上にもつながる。もちろん聴衆を前に一人で語ること（スピーチ）自体がプレゼンテーション能力の訓練になるし、場慣れにつながる。場慣れだけが目的であれば、英語落語である必要はない。教員養成科目の授業などで、授業初めの *small talk* の練習や模擬授業、教壇実習などもその練習になるし、ディベートやディスカッションもスピーチの訓練になる。ここでは、英語落語が、一人語り（スピーチ）という点でプレゼンテーション能力の向上につながる点について述べてみたい。

まず、英語落語は、台本を書き（自分で加えたいセリフや言いやすいように変えることも含

めて)、何度も読んで、覚えることが重要だ。良いプレゼンテーションでもそれは重要なことである。プレゼンテーションソフトを使ったスライド資料などを自分のメモにも使っている発表を目にすることがあるが、それは良くないプレゼンテーションの例である。言いたいこと、伝えたいことが自分の中に「入っている」状態になるまで繰り返し練習することが必要なのである。

次に、その「入った」内容に感情を込めなければならない。英語落語であれば、その登場人物の性格、性別、年齢などの人物像を設定し、その人物になりきって感情をこめて演じる。プレゼンテーションでも、自分の言いたいことや他者の論を引用する際など、感情をこめて「演じる」ことが重要となる。また、プレゼンテーションのスキルのひとつに「モジュレーション」がある。スピーチの途中で声の大きさを変えたり、話すスピードを速くしたり遅くしたり、時には黙ったりして聴衆をひきつける技術である。これも、英語落語では必要な技術で、いわゆる「間」である。間が悪いと、同じサゲでも笑いの量が異なる。

目線も重要である。アイコンタクトは、スピーチの基本である。英語落語も、上下を振り分けて他の登場人物と話しているときは、基本的に目線を動かしてはならない。また、目線でものの大きさや動いているさまなども聴衆に想像させる。小道具やジェスチャーで聴衆の興味を引き付けるところも同様である。一人二役で相手に質問を投げかけ、直後の相手の答えを省略して噺が進行するなど落語の手法であるが、スピーチにも応用できる。「誰がそんなことを言ったんだい。そう、お前さんだよ」という具合に、である。

このように、英語落語とプレゼンテーションには共通点が多い。これも、英語教育における英語落語の付加価値のひとつであると言える。

3.3 教員に必要な資質の伸長

昔から、「教員は五者たれ」と言われる。「五者」とは、学者、医者、易者、役者、芸者のことである。教える教科の専門的な知識や指導力を持っているという意味での「学者」。生徒・学生に対して精神的・身体的に適切な知識や指導力を持っているという意味での「医者」。進路指導や人生への導きという意味での「易者」。個人やクラスなどの集団で強い信頼関係を構築するという意味での「役者」。そして、望ましい学習環境を整え、目指す目標に生徒・学生を誘導する「芸者」である。教員は、生徒や学生にとってある意味「なんでもできなければならない」存在である。英語教育における英語落語は、根底に「笑い」を持ち、肯定的ならびに積極的に学びや人生に対する姿勢を構築する上で、重要な視点のひとつなのである。

おわりに

本稿では、英語科教員養成科目への応用を視野に入れ、「英語落語」の意義とその可能性について考察してきた。第1章「英語落語の概要」では、英語落語の歴史と英語教育における英語落語の意義について、第2章「英語教育における英語落語の実態と実践の試み」では、中高の検定教科書における題材としての英語落語の実態を概観し、また、実際の高校や大学の教育現場での英語落語の授業実践を紹介した。そして、第3章では「英語科教員養成科目への応用」と題して、近い将来における本学での英語科教員養成に英語落語を導入する可能性も視野に入

れつつ議論を行った。

今後の課題としては以下の3点が挙げられる。まず、何よりも英語落語の指導ができる教員の確保が挙げられる。プロの落語家を含めて英語落語の演者を探すのは、金銭的な問題は別として、さほど難しくはない。しかし、英語教育という視点から英語落語を英語科教員養成課程に位置づけることができる教員はなかなか見つからないかもしれない。次に、英語落語をシラバスに組み込み、教員養成課程の授業の中で実践していく方法を具体的に検討する必要がある。外部講師をスポット的に呼び込むだけでは、学生が英語落語を実践にまでつなげるのは難しいと考えられる。日本語で語られる落語を英語に置き換える作業をグループワークで行うなど、現行、および次期学習指導要領で求められているアクティブラーニング的な授業を学生自身が体験するような授業運営も必要となってくるだろう。最後に、英語落語を導入したことによる効果を測るための中長期的な質的・量的な調査も肝要であろう。

あとがき

本稿は拝田清と藤吉大介の共著論文である。拝田が「はじめに」と「おわりに」の原案を担当し、本文は主に藤吉が執筆を担当した。

【引用・参考文献】

- 井上宏（2002）「〈笑い学〉研究について」『笑い学研究第九号』日本笑い学会
——（2010）『笑いの力～笑って生き生き～』関西大学出版部
- 大島希巳江（2001）「落語から RAKUGO へ——英語落語翻訳への挑戦状」『CURRENT ENGLISH』11月号
研究社, pp.16-20
——（2006）『日本の笑いと世界のユーモア』世界思想社
- 桂枝雀（1988）『枝雀のアクション英語講座——英語落語を楽しんで英会話が身につく本』祥伝社
- 塩沢泰子（2008）「演劇の手法・理論を導入した新しい英語教育の可能性——アジア演劇ワークショップに参加して——」『湘南フォーラム：文教大学湘南総合研究所紀要 第12号』文教大学出版事業部, pp.33-43
- 立川志の輔・大島希巳江（2008）『英語落語で世界を笑わす！——シッダウン・コメディによるこそ——』研究社
- 谷口幸夫監修（2011）DVD版・英語教育遺産「大阪プロジェクト⑥英語落語」
- 西田元彦他（2012）「作り笑い（整膚と笑いヨガ）による健康効果——心理学的、免疫学的、内分泌学的指標から——」『笑い学研究第十九号』日本笑い学会, pp.67-73
- 西本晃二（2011）『落語「死神」の世界』青蛙房, pp.332-343
- 藤澤良行（2010）「学生の〈自身力〉を育てる〈英語落語〉」JACET 全国大会要綱 49
- 松本幸夫（2011）『図解スティーブ・ジョブスのプレゼン術』総合法令出版
- 森住衛（1992-1993）「英語教育題材論（1）～（12）」『現代英語教育』研究社出版
——（2006）「よい授業とは何か」*Salon Yearly 2006*, 巻頭寄稿 大阪教員英語研究会
- 山本伸弥他（2016）『「プレゼン」力～未来を変える「伝える」力～』講談社
- 山本正昭（2001）「英語 RAKUGO の系譜」『CURRENT ENGLISH』11月号 研究社, pp.14-15
——（2005）「英語落語と英会話」『平成16年度国際理解教育研究会報告書 No.22』京文社
- Deneire, Marc（1995）“Humor and Foreign Language Teaching”, *International Journal of Humor research*, 8-3, pp.285-298.

